

## 飛鳥と明日香

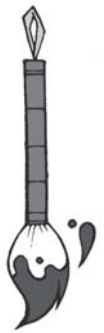
和銅三年庚戌春二月從藤原宮遷于寧樂宮時御輿停長屋原廻望古郷作歌一書云 太上天皇御製「和銅3年（708年）春二月に藤原宮から平城宮に都を移す際、藤原京と平城京の間付近の長屋原（現在の天理市付近か）で、慣れ親しんだ都を振り返って、元明天皇が詠んだ歌」

飛ぶ鳥の明日香の里を置きて去なば君があたりは見えずかもあらむ 一云 君があたりを見ずてもかもあらむ

訳・（飛ぶ鳥の）明日香の里を残し置いていたら、あなたのいらっしやるあのあたりは見えなくなってしまうのでしょうか。（万葉集一・78）

この平城遷都は、701年の大宝律令の制定と共に律令体制の確立、役所の増設などによる都の拡大、当時、東アジアの中心であり最新の都市であった長安城では、宮城・皇城の位置が都の北端にあったのに対し藤原京では中央に宮城が位置しており、アジアの新秩序とされる唐（周）・渤海・新羅に対抗し得るために都の新設を進めたとされています。また、この平城京新設には、藤原不比等の強い関与があったと考えられており、当時、不比等の右腕として中央で活躍した下毛野朝臣古麻呂も当然のことながら、このプロジェクトに関与していたと考えられます。では、不比等や古麻呂が活躍した7世紀とはどのような時代なのでしょう？7世紀とは西暦601

年から700年までの100年間を指します。601年は、推古天皇9年にあたり、聖徳太子が斑鳩宮を建てた年とされます。700年は文武天皇4年、その翌年が大宝元年（701）で大宝律令が制定された年となります。この頃、国名・王朝名が「倭」であったのが、大宝律令で「日本」に変わります。ほぼこの100年間の7世紀が「飛鳥時代」となります。鎌倉時代や江戸時代と同じように、飛鳥地方に都があったことから飛鳥時代と呼ばれます。この時代は、遣隋使・遣唐使によりもたらされた新しい情報、政変である大化の改新（乙巳の変）、国の行く末に重大な影を落とした外交問題としての白村江の戦い、同様に国を二分する戦いであった壬申の乱など、今の私たちが歴史が変わっていったかもしれない大事件が複数起きた時代でもありました。教科書では飛鳥時代と習いますが、明日香時代では×となります。奈良県明日香村はありますが、飛鳥村はありません。明日香村のHPによるとアスカの語源は複数あるようですが、主なものを用います。外来説1・渡来人が日本に来て安住の宿とした場所を安宿（あすか）とされ、安宿は半島の言葉でアスカとなった説。外来説2・古代の半島語で村を意味する「スカ」に接頭語「ア」がついてきた説。外来説3・インドでは「アスカ」とは理想の楽園という意味。鳥説・古代において年号に「白雉」「朱鳥」「白鳳」などと鳥はめでたい生き物とされ、



下野市教育委員会 文化財課

「イスカ」という鳥の名前から「アスカ」となった。地形説・地形を表現する単語、浅い川（アスカ）などの説があるようです。飛ぶ鳥と書いて飛鳥となったのは、冒頭で記した「飛ぶ鳥の明日香」として枕詞に使われるようになったからとのこと。古事記・日本書紀では飛鳥が用いられ、万葉集では明日香が多く用いられているようです。明日香村は昭和31年の高市村、阪合村、飛鳥村の3村が合併して生まれた名前とのこと。

では、なぜ下野市が「東の飛鳥」のネーミングを使用しているのでしょうか？栃木県（下毛野国）を代表する古墳時代のモノユメントである前方後円墳や巨大円墳・方墳は宇都宮市・壬生町・上三川町・小山市と本市に点在します。古墳時代は3世紀末頃から7世紀初頭頃までの約400年間続きます。北関東地方の古墳時代の幕開けは、本市の三王山南塚2号墳からと言っても過言ではありません。120mを超える最初の大型前方後円墳は、宇都宮市の笹塚古墳となります。6世紀後半、地元の首長達が「下野型」として当地特有の特徴を持つ古墳を造ります。その緒言は、壬生町・栃木市の吾妻古墳となります。7世紀の飛鳥時代になり古墳を造るのをやめて寺院を最初に建てたのが、下野薬師寺となります。（次号へつづく）